

家庭における過去の食事場面と大学生の父親および母親との心理的結合性の関連

平井 滋野・岡本 祐子*

(九州女子短期大学, *広島大学大学院教育学研究科)

原稿受付平成17年2月7日; 原稿受理平成17年11月4日

The Relationship between the Factors of Past Meal Scenes and Parent-Child Psychological Connection of University Students

Shino HIRAI and Yuko OKAMOTO*

Kyushu Women's Junior College, Fukuoka 807-8586

**Graduate School of Education, Hiroshima University, Hiroshima 739-8524*

The purpose of this study on university students is to examine how the factors of their past meal scenes have affected their father-child and mother-child psychological connection. A total of 694 university students (238 males and 456 females) completed the questionnaires provided. The factors of past meal scenes consisted of "concerns in preparing meals," "ease and handiness of meals," "mutual communication at dinner table," "pleasant atmosphere," "discipline of manners," and "frequency of table talk." The main results are as follows: (1) The "pleasant atmosphere" at dinner table has an effect on both the father-child and mother-child psychological connection. (2) The father-child psychological connection is affected by the "frequency of table talk," while the mother-child psychological connection is affected primarily by "concerns in preparing meals" and "mutual communication at dinner table." (3) The difference of students' lifestyle affects their mother-child psychological connection; the connection is affected only by "pleasant atmosphere" for those commuting to the campus from home whereas the connection is influenced by "pleasant atmosphere," "concerns in preparing meals" and "mutual communication at dinner table" for those living alone near or on the campus.

(Received February 7, 2005; Accepted in revised form November 4, 2005)

Keywords: university student 大学生, father-child psychological connection 父親との心理的結合性, mother-child psychological connection 母親との心理的結合性, factors of meal scenes 食事場面の諸要因.

1. 緒言

今日、子どもの食生活の危機的状況を鑑み、行動計画や施策が思案され(例えば、中央教育審議会 2004; 厚生労働省 2004)、食生活を見直す動きが全国的に活発化している。保育、教育の現場においても、まさに、「食育」を推進すべく、「乳幼児期から思春期まで発達段階に応じた」多様な取り組みがなされている(厚生労働省 2004)。このような食育の取り組みでは、子どもたちに正しい食事の摂り方や食習慣が定着することと共に、家族が関わり合い、互いに心理的な結びつきを深めていくことが期待されている。

食生活において、従来、重視されてきた栄養的側面

に加え、一緒に食べること、とりわけ家族そろって食べることの重要性が言及されている。研究においても、親子・家族関係の形成に、食事場面での会話によるコミュニケーションが重要であることが指摘されている(表 1991; 黒川と小西 1997; 平井と岡本 2001, 2003)。確かに、親子・家族関係の形成において、食事場面の会話は重要である。しかし、家族一緒に食事場面において、会話によるコミュニケーション以外の要因は、親子・家族関係に関連しないのであろうか。

筆者らは、食生活と子どもの発達に関する研究を概観し、① 家族・親子関係に影響を及ぼす要因として、共食や食事での会話頻度以外の検討があまりなされて

いないこと、② 父子関係を含めた研究が見られないことを指摘し、親との心理的な結びつきと会話頻度以外の食事場面の諸要因との関連について検討した(平井 2003; 平井と岡本 2005)。その結果、栄養的配慮のある食事や、食事を介した交流が多く良好な食卓の雰囲気である食事場面は、小学生、高校生が認知した親との心理的な結びつきと関連することを明らかにした。これより、親子関係を育む食事場面のあり方について、多角的に捉えて検討する必要性が推察された。

ところで、現在、推進されている食育は、「乳幼児から思春期まで」の時期を重視している。では、なぜ家庭を中心とした食に関する取り組みを行うことが、この時期を中心として展開されるのであろうか。大谷等(2003)は、大学生の「自我同一性形成を促し、人格全体の発達に関わる総合的概念である独立意識」に、家族を中心とした「食にまつわる過去の体験が深く関わっている」ことを明らかにしている。つまり、大谷等の研究結果は、幼少期に家庭を中心とした食に関する取り組みが、その時期の子どもの発達だけでなく、後の子どもの心理的な発達に関連している、という点において、食育の推進に大変示唆的である。しかし、大谷等の示す、食にまつわる過去の体験とは、食事の環境を多角的に捉えておらず、具体的なものではない。また、親子関係についても分析を行っているが、食事体験との関連について実証的に検討されていないことが指摘される。

青年期後期は親子関係のあり方を質的に変化させる時期であり(落合と佐藤 1996)、親から心理的に分離することだけでなく、同時に親和的な関係を再び結び直すことが重要となる(西平 1990)。青年期後期の親子関係と家庭における過去の食事場面のあり方との関連を実証的に明らかにすることにより、推進されている食育に生涯発達の視点に基づく知見を提示できると考える。

そこで本研究では、青年期後期にあたる大学生の認知した現在の父親および母親との心理的結合性と、家庭における過去の食事場面の諸要因との関連を明らかにすることを目的とする。

親子関係における心理的な結びつきについては、平井と岡本(2003)同様に、父親および母親との心理的結合性から捉え、「子どもの親に対する愛情・理解・信頼の認知、および親からの愛情・理解・信頼の受けとめ」と定義する。また、過去の家庭における食事場面の諸要因は、平井と岡本(2005)で用いた諸要因に、

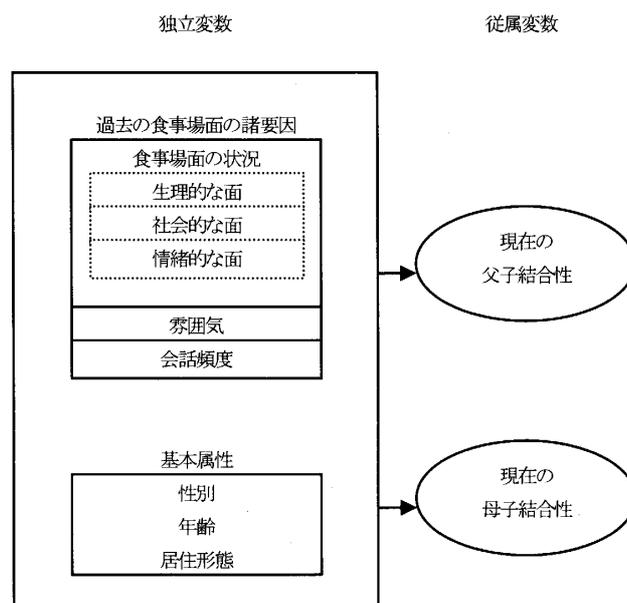


図 1. 研究の枠組

食事場面における会話頻度を加えて捉える。本研究の枠組については、図 1 に呈示した。

2. 方 法

(1) 調査対象者と調査時期

福岡県、広島県、岡山県の国立大学、公立大学、私立大学の学生を対象に質問紙調査を実施した。大学の講義の始まり、もしくは終わりの時間に、講義担当者より許可を得て、配布し、回収した。886部を配布し、766部を回収(回収率86.5%)、そのうち未記入の多いもの、また、父親と母親の両者に対する子どもの認知を中心とした分析のため、父子・母子のみの家族形態のものを除いた694部が分析対象とされた(有効回答率78.3%)。調査は2003年6月下旬から10月下旬に実施された。

(2) 調査対象者の属性

調査対象者は、男性238名(34.3%)、女性456名(65.7%)であり、平均年齢は19.7歳(18~24歳)であった(表1)。出身地域は、中国地区41.4%、九州・沖縄地区33.3%、四国地区や近畿地区それぞれ約10%であった。家族形態は、核家族446名(64.3%)、拡大家族239名(34.4%)であり、現在の居住形態は、自炊生活をしている一人暮らし462名(66.6%)、自宅生231名(33.3%)であった。

(3) 調査内容

① 父親および母親との現在の心理的結合性に関する項目各7項目：木田と大谷(1992)による父子間の

家庭における過去の食事場面と大学生の父親および母親との心理的結合性の関連

表1. 大学生の属性

		人数	n=694 (%)
平均年齢		19.7 (SD; 1.68)	
性別	男性	238	(34.3)
	女性	456	(65.7)
家族形態	核家族	446	(64.3)
	拡大家族	239	(34.4)
	不明	9	(1.3)
居住形態	一人暮らし	462	(66.6)
	自宅生	231	(33.3)
	不明	1	(0.1)
出身地域	九州・沖縄	231	(33.3)
	四国	74	(10.7)
	中国	287	(41.4)
	近畿	56	(8.1)
	東海	21	(3.0)
	信越・北陸	10	(1.4)
	関東	9	(1.3)
	北海道・東北	4	(0.6)
	不明	2	(0.3)
	所属学部	教育学	362
理学・工学		150	(21.6)
文学・経済学		106	(15.3)
農学		39	(5.6)
医学		33	(4.8)
不明		4	(0.6)

心理的紐帯をはかる質問3項目を参考に、平井と岡本(2003)において作成された心理的結合性に関する質問項目を用いた(1. 私は(父親・母親)のことを理解しています, 2. 私は(父親・母親)に感謝しています, 3. 私は(父親・母親)のことを信頼しています, 4. (父親・母親)は私のことを理解しています, 5. (父親・母親)は私のことを尊敬しています, 6. (父親・母親)は私のことを信頼しています, 7. 私は(父親・母親)のことが好きです)。「非常に当てはまる」5点～「全く当てはまらない」1点と得点化し、現在の父親との心理的結合性、現在の母親との心理的結合性(以下、それぞれ父子結合性、母子結合性と記す)に対する回答をそれぞれ集計した。

②過去の食事場面の状況に関する項目26項目: 中学生以前の家庭での食事場面の状況について尋ねた。平井と岡本(2005)の父親・母親の質問紙内容の、家庭の食事場面に対する意識・態度項目を再考し、作成

した*¹(項目は表2参照*²)。「非常に当てはまる」7点～「全く当てはまらない」1点と得点化し、集計した。

③食事場面における会話頻度: 父親と本人、母親と本人、および父親と母親の会話頻度について尋ねた。「非常に当てはまる」7点～「全く当てはまらない」1点と得点化し、集計した。

④基本属性: 性別、年齢、家族形態、現在の居住形態、出身地域、所属学部について尋ねた。

統計処理には解析ソフトSPSS(11.5 version)を用いた。

3. 結果

(1) 親との心理的結合性と基本属性の関連

心理的結合性については、基本属性(年齢、性別、家族形態、出身地域、所属学部、居住形態)と親との心理的結合性の関連について調べた。

主因子法による因子分析の結果、1因子性が確認できたため、7項目の合計得点を心理的結合性得点とし(最高値35、最低値7)、それぞれ α 係数を求めた(父子結合性 $\alpha=0.92$ 、母子結合性 $\alpha=0.92$)。平均値は、父子結合性は25.6点(SD 6.53)、母子結合性は29.1点(SD 5.27)であった。

年齢について、父子結合性と年齢は有意な正の相関が見られ($r=0.08$, $p<0.05$)、年齢があがるほど父子結合性の得点が高かった。一方、母子結合性には関連が見られなかった($r=0.02$, ns)。性別について、父子結合性については男性が有意に高く($t_{(694)}=2.09$, $p<0.05$)、母子結合性については女性が有意に高かった($t_{(694)}=-296$, $p<0.01$)。

家族形態については有意な差が見られなかった(父子結合性 $t_{(685)}=1.36$, ns; 母子結合性 $t_{(685)}=-0.49$, ns)。

地域についても、有意な差が見られなかった(父子結合性 $F_{(7,684)}=1.79$, ns; 母子結合性 $F_{(7,684)}=1.89$, ns)。

学部については、母子結合性において教育学部所属の学生が、理学・工学部所属の学生より有意に高い得

*¹ 平井と岡本(2005)の子ども用質問紙内容の食事場面の状況に関する質問項目は、小学生に理解できるように配慮し詳細については尋ねられていない。そのため、親用質問紙内容を基盤に再検討した。

*² 表には因子分析で削除された項目を除く項目が記してある。

点であった（父子結合性 $F_{(7,685)}=2.00$, ns; 母子結合性 $F_{(7,685)}=2.85$, $p<0.05$).

居住形態については、父子結合性、母子結合性ともに、一人暮らしが有意に高かった（父子結合性 $t_{(693)}=7.28$, $p<0.001$; 母子結合性 $t_{(693)}=4.43$, $p<0.01$).

(2) 大学生が認知した家庭における過去の食事場面の諸要因と心理的結合性の関連

1) 大学生の認知した家庭における過去の食事場面の諸要因

大学生が認知した家庭における過去の食事場面の状況に関する項目の回答について、因子分析（主因子法・

バリマックス回転）を行った。

因子負荷量が0.30より低いものは削除し、再度、因子分析を行ったところ、5因子が抽出された（表2）。その結果、全分散の45.77%が説明され、因子負荷量0.40以上の項目内容について解釈を行った。第1因子は「味やメニューはバランスが考えられていた」、「体調や嗜好に合わせてられた献立だった」など栄養的配慮や嗜好の採り入れなどについて、子どもの身体への影響を考慮された料理全般の配慮であったため、「料理への配慮」と命名した（平均値46.6点、標準偏差6.47）。第2因子は「惣菜やレトルト食品がよくあった」、「外食が多かった」など食産業の発展に伴って簡

表2. 大学生の認知した過去の家庭の食事場面（バリマックス回転後）

	因子					共通性
	1 $\alpha=0.83$	2 $\alpha=0.69$	3 $\alpha=0.70$	4 $\alpha=0.79$	5 $\alpha=0.67$	
1. 料理への配慮						
味やメニューはバランスが考えられていた.	0.880	-0.149	0.076	0.086	0.129	0.827
栄養のバランスが考えられていた.	0.820	-0.182	0.035	0.040	0.119	0.722
手作りの料理が多かった.	0.577	-0.435	0.174	0.058	0.036	0.558
体調や嗜好に合わせてられた献立だった.	0.528	-0.113	0.231	0.231	0.096	0.413
品数が3つ以上あった.	0.522	-0.231	0.023	0.157	0.060	0.354
盛り付け、配膳など見た目が良かった.	0.430	-0.195	0.170	0.301	0.186	0.377
食事の時間はだいたい決まっていた.	0.365	-0.223	0.107	0.154	0.143	0.239
季節、行事、イベントにあった食事があった.	0.338	-0.015	0.322	0.058	0.271	0.294
2. 料理の簡便性						
惣菜やレトルト食品がよくあった.	-0.248	0.695	-0.100	0.015	-0.053	0.558
外食が多かった.	-0.076	0.613	0.110	0.002	-0.025	0.394
お菓子やケーキなどで食事を済ませることがあった.	-0.143	0.558	0.040	-0.069	0.070	0.343
料理が入っていたトレー・パックのままだった.	-0.163	0.488	-0.024	-0.052	-0.082	0.275
3. 相互交流						
料理のことについておしえてくれた.	0.183	0.001	0.606	0.042	0.155	0.426
食事の前からその場にいた.	0.050	0.027	0.574	0.375	0.041	0.475
食事の準備や片付けなど手伝っていた.	0.067	0.008	0.557	-0.005	0.311	0.411
食後しばらくその場にいた.	0.081	0.011	0.534	0.393	-0.044	0.448
4. 雰囲気の良い						
楽しい雰囲気だった.	0.209	-0.028	0.198	0.769	0.143	0.696
おちつく雰囲気だった.	0.198	-0.088	0.105	0.718	0.060	0.577
5. 会話頻度						
食べ残しをすると注意された.	0.059	-0.024	0.051	0.020	0.620	0.391
味わって食べるように言われた.	0.154	0.018	0.134	0.114	0.613	0.431
食事マナーや行儀を注意された.	0.124	-0.079	0.141	0.052	0.601	0.406
累積寄与率 (%)	14.53	23.22	31.03	38.82	45.77	

家庭における過去の食事場面と大学生の父親および母親との心理的結合性の関連

便化してきた食の特徴が表れた項目であったため「料理の簡便性」と命名した（平均値 9.08 点，標準偏差 3.97）。第 3 因子は「料理のことについておしえてくれた」，「食事の前からその場にいた」など交流を促す項目であるため，食事に関わる「相互交流」と命名した（平均値 19.0 点，標準偏差 5.14）。第 4 因子は「楽しい雰囲気だった」，「おちつく雰囲気だった」とポジティブな食事場面を表わしているため「雰囲気の良さ」と命名した（平均値 11.0 点，標準偏差 2.17）。第 5 因子は「食べ残しをすると注意された」，「食事マナーや行儀を注意された」という食事を通してなされたしつけであるため「しつけ・マナー」と命名した（平均値 14.5 点，標準偏差 3.69）。この尺度の信頼性を検討するため Cronbach の α 係数を求めたところ，第 1 因子は $\alpha=0.83$ ，第 2 因子は $\alpha=0.69$ ，第 3 因子は $\alpha=0.70$ ，第 4 因子は $\alpha=0.79$ ，第 5 因子は $\alpha=0.67$ であった。

また，会話頻度について，父親と子，母親と子，父親と母親の会話頻度に関する項目を得点化し，因子分析した結果，1 因子性が確認されたため 3 項目の合計を「食事場面の会話頻度」とした（平均値 16.1 点，標準偏差 3.98， $\alpha=0.76$ ）。

2) 親との心理的結合性に関連する食事場面の要因
父子結合性，母子結合性に関連する食事場面の諸要因を検討するために，父子結合性，母子結合性それぞれを基準変数とし，食事場面の諸要因を説明変数とする重回帰分析を行った。基本属性との関連も見られたため，基本属性の性別，年齢，居住形態をダミー変数に換算し，説明変数に加えて分析を行った。まず，基準変数および説明変数の各変数間においてピアソンの

相関関係を算出した（表 3）。説明変数間で最も高い値が「雰囲気の良さ」と「食事場面の会話頻度」の間で 0.451 であり，それぞれの説明変数間の相互相関は比較的弱いと言える。また，説明変数間の許容度は 1～0.69 の間で VIF (Variance Inflation Factor) 値は 1.00～1.46 と小さかったため，多重共線性の影響は小さいものと判断し，分析を行うこととした。

次に父子結合性，母子結合性それぞれを基準変数として重回帰分析を行った（表 4）。その結果，父子結合性には「会話頻度」が最も大きい説明力を有しており，続いて「雰囲気の良さ」，「居住形態」，「性別」，「年齢」であった。母子結合性には「雰囲気の良さ」，「料理への配慮」，「居住形態」，「相互交流」の順に説明力を有していた。

以上の分析より，父子結合性，母子結合性に共通して，食事場面の「雰囲気の良さ」は重要な規定要因の一つであること，また，「居住形態」も関連する要因であることが明らかにされた。しかしながら，父子結合性と母子結合性の規定要因には差異が見られ，特徴的なものとして父子結合性には「会話頻度」が，母子結合性には「料理への配慮」，「相互交流」が規定要因であることが示された。

3) 居住形態別に見た心理的結合性との関連

属性分析より，居住形態によって父子結合性，母子結合性の得点ともに有意な差がみとめられた。そこで，居住形態別に，父子結合性，母子結合性と食事場面の諸要因との関連を検討するために，食事場面の諸要因を説明変数とする重回帰分析を行った（表 5）。

その結果，自宅生の認知した父子結合性には，「会話頻度」および「雰囲気の良さ」が，自宅生の認知し

表 3. 諸項目の相関分析

	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
① 父子結合性	0.583**	0.083*	-0.079*	-0.267**	0.257**	-0.054	0.225**	0.399**	0.127**	0.500**
② 母子結合性		0.022	0.112**	-0.116**	0.369**	-0.083**	0.298**	0.471**	0.112**	0.309**
③ 年齢			-0.301**	-0.191**	-0.018	-0.063	-0.056	-0.106**	0.118**	-0.066
④ 性別				0.265**	0.088*	0.037	0.299**	0.141**	0.022	0.132**
⑤ 居住形態					-0.139**	0.096**	-0.055	-0.080*	-0.058	-0.037
⑥ 料理への配慮						-0.403**	0.350**	0.393**	0.299**	0.352**
⑦ 料理の簡便性							-0.025	-0.120**	-0.069	-0.046
⑧ 相互交流								0.391**	0.274**	0.396**
⑨ 雰囲気の良さ									0.186**	0.451**
⑩ しつけ・マナー										0.190**
⑪ 会話頻度										

ダミー変数として性別は男性=0，女性=1，居住形態は一人暮らし=0，自宅生=1 を当てはめて算出している。* $p<0.05$ ，** $p<0.01$ 。

表4. 親との心理的結合性を基準変数とした重回帰分析

説明変数	父子結合性 (n=692)	母子結合性 (n=692)
	β	β
年齢	0.070*	—
性別	-0.091**	—
居住形態	-0.196***	-0.108**
料理への配慮	—	0.182***
料理の簡便性	—	—
相互交流	—	0.089*
雰囲気の良い	0.216***	0.365***
しつけ・マナー	—	—
会話頻度	0.412***	—
R^2	0.356	0.279
調整済み R^2	0.352	0.275
F 値	75.96***	66.38***

年齢の未記入が1名、居住形態の未記入が1名であるため、合計2名が削除された。* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$.

表5. 居住形態別にみた親との心理的結合性を基準変数とした重回帰分析

説明変数	自宅生 (n=231)		一人暮らし (n=461)	
	父子結合性	母子結合性	父子結合性	母子結合性
	β	β	β	β
料理への配慮	—	—	—	0.258***
料理の簡便性	—	—	—	—
相互交流	—	—	—	0.109*
雰囲気の良い	0.216**	0.452***	0.195***	0.327***
しつけ・マナー	—	—	—	—
会話頻度	0.348***	—	0.461***	—
R^2	0.231	0.205	0.334	0.300
調整済み R^2	0.224	0.201	0.332	0.296
F 値	30.20***	58.95***	115.06***	65.37***

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$.

た母子結合性には「雰囲気の良い」が大きな説明力を有していた。一人暮らしの学生の認知した父子結合性には、自宅生同様、「会話頻度」および「雰囲気の良い」が大きな説明力を有していたが、一人暮らしの学生の認知した母子結合性は、「雰囲気の良い」だけでなく、「料理への配慮」、「相互交流」が説明力を有していた。

4. 考 察

本研究では、まず、親との心理的結合性と基本属性の関連を検討した。続いて、過去の食事場面の諸要因

「料理への配慮」、「料理の簡便性」、「相互交流」、「雰囲気の良い」、「しつけ・マナー」および「会話頻度」と、大学生が認知した父親および母親との心理的結合性との関連について、重回帰分析を用いて検討した。以下、それらの結果について考察する。

(1) 親との心理的結合性と基本属性の関連性

性別の分析より、父子結合性は男性が有意に高く、母子結合性は女性が有意に高い得点であった。青年期後期の親子関係において、男性よりも女性と母親の結びつきが強い傾向にあることが先行研究でも指摘されているが(渡邊 1995; Geuzaine *et al.* 2000)、本研

家庭における過去の食事場面と大学生の父親および母親との心理的結合性の関連

究においても類似した結果が見られた。一方、青年期の男性と父親の結びつきの強さについてはあまり言われていないが、男女ともに成人へと発達する過程で、同性である親に対して、理解できることが増え、信頼が強まっていくことが推測される。そのため、父子結合性は男性の方が、母子結合性は女性が高かったとも考えられる。また、年齢と心理的結合性の相関分析から、父子結合性と年齢に有意な相関関係が見られた。進路の選択が課題となる大学生の後半期には、特に父親を見直す傾向にあると言われる(鶴田 2001)。さらに、本研究においては、男性の平均年齢が20.4歳で、女性の平均年齢19.4歳より高かった。このことを考慮すると、父子結合性は男性が有意に高かった結果には、年齢も関連していたことが推察される。

居住形態の分析より、一人暮らしが父子結合性および母子結合性ともに有意に高い得点であった。親からの自立意識が高い欧米の青年における調査結果から、物理的に親から離れることは、親との情緒的絆を確かめ、親を一個人としてとらえ、親との関係を見直す作業や親からの心理的な独立を促進することが示唆されている(Farley 1979; Sullivan and Sullivan 1980)。また、西平(1990)は、日本の青年を対象とした集団面接的話し合いから、自宅生は生活や経済的な面において高校生活の延長にあり、青年が「物理的な隔離なしに心理的離乳を完成させることは、非常に困難」であることを指摘した。青年期後期は親から心理的に分離することと同時に、結合し直すことが大切な課題となる(西平 1990)。そのため、親との心理的結合性を見た本研究においても、類似した結果が示されたと考えられる。

(2) 食事場面の雰囲気的重要性

父子結合性および母子結合性ともに、大きな説明力を有していた食事場面の要因は、「雰囲気の良さ」であった。小学生、中学生、高校生の親子関係において、食事場面の雰囲気が重要であることは先行研究においても示唆されているところである(川崎 2001; 平井 2003; 平井と岡本 2005)。食事場面は心理的な安らぎを感じることでできる場であり、その場にいる人と人、家庭であるならば親と子の関係を感じる場である(滝川 1991; 青木 1999; 生野 2001)。「心理的な場としての食卓の意味合いが色濃く意識される」(滝川 1991)ため、その場全体に表わされる雰囲気の良さが親子関係の良好さに影響を及ぼすと推察されている。本研究の結果から、家庭で食事をする機会の多い青年

期前期に体験してきた食事場面の雰囲気が、親子関係を見つめ直す時期である大学生の認知した親との心理的結合性に関連する要因の一つとして明らかにされた。先行研究の結果を照合させると、つまり、小学生が体験している食事場面の雰囲気は、その時期の親子関係に関連するだけでなく、後の親子関係においても関連すると推察される。

では、なぜ雰囲気が親との心理的結合性と関連する要因の一つとなるのであろうか。鯨岡(1997)や渡辺(1999)は、言語ではなく、その場において身体で感じることを共有すること自体がコミュニケーションとなり、それを繰り返すことで、深い関係が築かれていくことを明らかにしている。その場の空間、その場の雰囲気を共有することが「親子の絆を築く基盤」(渡辺 1999)となるのである。つまり、食事場面で感じられる雰囲気は心理的な結びつきの基盤となるため、家庭の食事場면을共有したであろう父親および母親ともに、雰囲気の良さが強く関連したと考えられる。

(3) 父子結合性と母子結合性に関連する要因の違い

父子結合性と母子結合性では、関連した要因に差異が見られた。「雰囲気の良さ」以外に、父子結合性においては「会話頻度」が関連要因と示唆された。一方、母子結合性には「料理への配慮」や食事を通じた「相互交流」が関連要因であることが明らかにされた。

これまで、小学生と高校生を対象にした研究から、父親も母親も食事場面は子どもとよく会話ができる場として認知していること、会話頻度が父子結合性および母子結合性に関連することを明らかにし、会話の重要性を推察した(平井と岡本 2003)。小学4年生から中学3年生の父親は、子どもとの接触時間や子どもの理解度が母親よりも少ないと認識しており(内閣府 2001)、この時期の父親と子どもが関わり合う機会を確保し、理解し合っていくことは、切実な問題である。さらに、本研究より、中学生以前の食事場面での会話頻度の高さは、大学生の父子結合性の高さプラスに関連することが明らかにされた。つまり、父と子が食事場面で頻繁に会話を図ることは、小中学生の時期のみならず青年期後期の父子関係にも影響を及ぼす可能性があり、青年期を通じた父親と子どもの関係において重要な食事場面のあり方であると推察される。

続いて、母子結合性においてのみ、「料理への配慮」や食事を通じた「相互交流」が関連した。これに類似した関連性は小学生において示唆されたが(平井と岡本 2005)、高校生において示唆されなかった(平井

2003). 小学生, 高校生を対象とした研究は, 現在経験している家族における食事場面について尋ねられている。一方, 大学生の本調査では, 体験してきた家庭における食事場面を回想的に尋ねられている。この違いは体験している食事場面と内在化されている食事場面の違いと言い換えることができる。我が国では, 食事作りは母親にゆだねられている現状にある。作り手の食べる人への関心, つまり, 母親の関心は, 料理への配慮や食事を通じた交流となって反映されるであろう。さらに, 毎日, このような食事を繰り返すことによって, 家庭における食事場面が内在化されていくと考えられる。そのため, 親との関係を見つめ直す時期の母親との心理的結合性において, 内在化された食事場面の「料理への配慮」や食事を介した「相互交流」の要因が関連したと推察される。

以上, 父子結合性, 母子結合性に関連した要因の差異は, 家庭における食事という同じ場面であっても, 父子関係と母子関係では関連する食事場面の要因が異なることを示している。しかし, この結果には, 家事・育児に対して, 母親が主となって従事せざるを得ない我が国の現状が反映されていることも考えられる。

(4) 居住形態による要因の違い

居住形態別に, 親との心理的結合性の高さに関連する食事場面の要因を検討した。その結果, 父子結合性は居住形態によって違いは見られず, 自宅生, 一人暮らしの学生ともに「会話頻度」, 「雰囲気の良い」が大きな説明力を有していた。一方, 母子結合性においては顕著な違いが見られ, 自宅生は「雰囲気の良い」のみが, 一人暮らしの学生は「雰囲気の良い」に加え, 「料理への配慮」, 「相互交流」が関連した。親元を離れて暮らすことは, 生活をサポートする産業が発展しているとは言え, 学生に生活的自立が求められる。特に, 毎日, 数回繰り返される食事に関しては, 母親の存在が大きかったことに気づかされるだろう。青年は, 過去と現在を照らし合わせ, 親への感謝や親密感を増していきながら親子関係を再構築していく(西平1990)。そのため, 一人で生活をするにより, 母親との関係において, 食生活を介して感謝や親密感を強く意識させられ, 本研究のような結果が得られたと推察される。

5. まとめと今後の課題

本研究では, 家族で食事をする機会の多い青年期前期の食事場面のあり方が, 青年期後期にあたる大学生

の親との心理的結合性に関連することを明らかにした。これまで, 経験的に食事が親子関係に及ぼす影響について述べられてきたが, それを裏付ける実証データに基づいた結果と言えよう。また, 生涯発達の視点より, 親子関係における家庭の食事の重要性が示唆された結果であると考えられる。

しかしながら, 今回調査した質問紙の項目内容からでは食事場面における諸要因について, 物理面と心理面の区別が明確になされていないため, さらなる検討が求められる。

また, 食事場面の雰囲気の良さが父子結合性および母子結合性を規定する重要な要因となることが示された。川崎(2001)や生野(2001)が推察しているように, 食事場面の雰囲気は, 食事の質や相互交流の図られ方など, 様々な面が全体的に関連して生じる要因であると考えられる。雰囲気の良さが何に規定されるのかを明らかにすることも, また重要な課題である。

最後に, 父子結合性と母子結合性では関連する食事場面の要因に差異が見られたが, この差異については今後さらなる検討を重ねる必要がある。

引用文献

- 青木義子(1999) 食事と家族, ころの科学, **85**, 28-33
 中央教育審議会(2004) 『食に関する指導体制の整備について(答申)』, 文部科学省, 東京
 Farley, J. E. (1979) Family Separation-Individuation Tolerance — A Developmental Conceptualization of the Nuclear Family, *J. Marital Family Therapy*, **5**, 61-68
 Geuzaine, C., Debry, M., and Lissen, V. (2000) Separation from Parents in Late Adolescence: The Same for Boys and Girls?, *J. Youth Adolescence*, **29**, 79-91
 平井滋野(2003) 親との心理的結合性と食事場面の諸側面との関連性, 青年心理学会第11回大会発表論文集, 24-25
 平井滋野, 岡本祐子(2001) 食事中の会話からみる家族内コミュニケーションと夫婦・親子の心理的結合性の関連の検討, 家族心理学研究, **15**, 125-139
 平井滋野, 岡本祐子(2003) 食事場面の会話と心理的結合性の関連, 青年心理学研究, **15**, 33-49
 平井滋野, 岡本祐子(2005) 小学生の家庭における食事場面の諸要因と父親および母親との心理的結合性の関連, 家政誌, **56**, 273-282
 生野照子(2001) 「食」と心の動き, 食の科学, **277**, 22-28
 川崎末美(2001) 食事の質, 共食頻度, および食卓の雰囲気が中学生の心の健康に及ぼす影響, 家政誌, **52**, 923-935
 木田淳子, 大谷直美(1992) 父親の子育て参与に関する家族関係の考察(第2報) 父子の心理的紐帯に及ぼす影響,

家庭における過去の食事場面と大学生の父親および母親との心理的結合性の関連

- 家政誌, **12**, 1087-1096
- 厚生労働省 (2004) 『楽しく食べる子どもに～食からはじまる健やかガイド～』—「食を通じた子どもの健全育成(—いわゆる「食育」の視点から—)に関する検討会」報告書一, 財団法人日本児童福祉協会, 東京
- 鯨岡 峻 (1997) 『原初的コミュニケーションの諸相』, ミネルヴァ書房, 京都
- 黒川衣代, 小西史子 (1997) 食事シーンから見た家族の凝集性, 家族関係学, **16**, 51-63
- 内閣府 (2001) 『青年の生活と意識 青少年の生活と意識に関する基本調査報告書 第2回調査』, 国立印刷局, 東京
- 西平直喜 (1990) 『成人になること』, 東京大学出版会, 東京
- 落合良行, 佐藤有耕 (1996) 親子関係の変化からみた心理的離乳への家庭の分析, 教育心理学研究, **44**, 11-22
- 表 真美 (1991) 共働き家庭の食生活と家族関係, 家族関係学, **10**, 82-91
- 大谷貴美子, 中北理映, 饗庭照美, 康 薔薇, 富田圭子, 南出隆久 (2003) 家庭における食生活体験や親の関わり方が青年期後期の自己独立性に及ぼす影響, 日本食生活学会誌, **14**, 14-27
- Sullivan, K., and Sullivan, A. (1980) Adolescent-Parent Separation, *Devel. Psychol.*, **16**, 93-99
- 滝川一廣 (1991) 表象としての食卓, 『シリーズ変貌する家族4 家族のフォークロア』(上野千鶴子, 鶴見俊輔, 中井久夫, 中村達也, 宮田 登・山田太一編), 岩波書店, 東京, 83-101
- 鶴田和美 (2001) 青年期: アイデンティティの危機, 『講座臨床心理学5 発達臨床心理学』(下山晴彦, 丹野義彦編), 東京大学出版会, 東京, 135-149
- 渡邊恵子 (1995) 青年期の親子関係, 日本女子大学紀要人間社会学部, **5**, 305-319
- 渡辺富夫 (1999) エントレインメント(引き込み)と親子の絆, 『赤ちゃんの認識世界』(正高信男編), ミネルヴァ書房, 京都, 51-74